接い（つい）体験
～地域の差別を考える統合高校～

研究背景～差別を考える高校～

豊後大野市は５町２村が合併して誕生した市だ。合併したら主要な機関は一つの町に集中してしまう、それを他の町の人たちはあまり快く思わない。そこで差別意識が生まれてしまう。そういった意識があると何をするにしても互いに難癖をつけて非協力的な行為をするようになる。しかし、近年地方移住者の増加やグローバル化に対応するためには地域の協力が不可欠である。今のままでは互いの町を偏った見方でしか見ないと考えた。そこで十分な理解度と柔軟な頭を持っていて、これからの社会を担っていく人材である高校生が今後の関係性を変えることができるのではないかと考えた。そして高校生が生活の大半を過ごす場である高校が適切ではないかと考え、設計することを考えた。

提案 ~ 差別を考えるための計画～

・教室をシャッフル

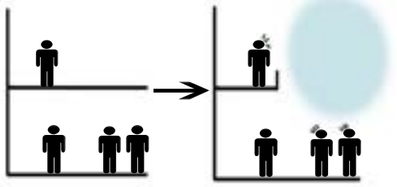
私が今回の提案したいものは、半年に一度教室を入れ替えること。差別は固定概念から起きるもので、一つの見方からでしかものごとを見ないことにより起こってしまうのではないかと思う。そこで教室がそれぞれ特徴的なものでそれを半年に一度入れ替えること人から聞いた見方と実際自分が体験して得た見方最低二つが手に入ることができる。そうした体験から自分が見て感じたりすることは様々ある見方のうちの一つでしかないものだと知ることができる。

・出身地ごとの玄関

どこの出身か意識づける場所が必要で玄関をそれぞれの町の出身専用の入口をつくった。そうすることで生徒同士で地域の出身地を認識させる。今まで自分が思っている町のイメージ出身者たちに意思付けることができる。そして、各町の出身者に無意識に行っていた言動を表面化させることができる。

・包容力があるアトリウム

広場をアトリウムにすることで人が集まりやすく、開放感と自然光が入る空間にした。雨風から身を守れ、安心して行動できる空間があることで集まりやすい環境をつくった。また集まることで知り合いなどを伝い今まで話したことない人達と交流するようになる。そうして他の町の人たちとの関係性ができ、今まで自分が勝手に思い込んでいた町のイメージと違う一面が見えてくるようになる。



敷地調査

敷地は**大分県豊後大野市緒方町下自在。**周辺に住宅や学校、スーパーなどがあり南側には比較的交通量が多い道路がある。駅から学生が多く来ることを北側から生徒の出入りが集中すると考えている。周辺には建物は多いが少子高齢化の影響か人通りは少ない。

⬆南側、周辺の道路に比べ交通量が多い

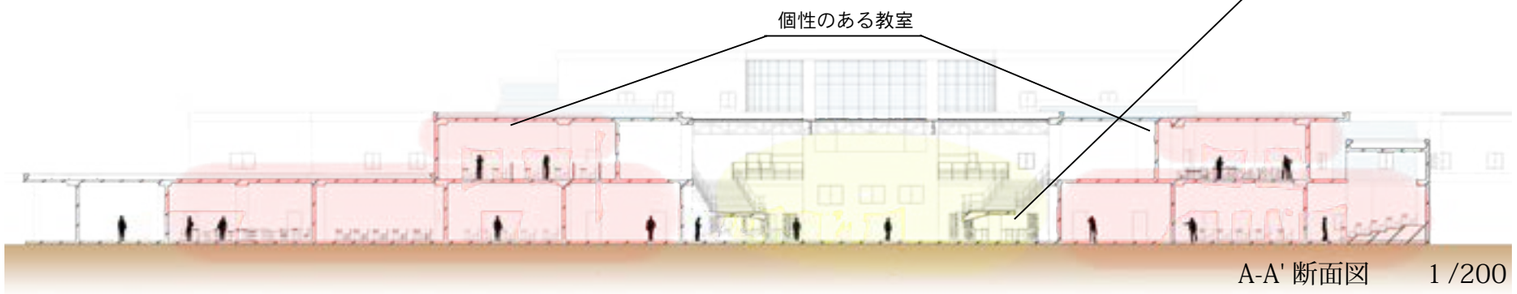
⬆北東に緒方小学校がある。

⬆南側に面している道路周辺の道路の中で車の交通量が多い。

⬆西側の景色。田んぼが広がっている

追体験と接い体験

追体験とは、「他人の体験をその人の言動などをたどることで自分の体験のようにとらえること」といった意味がある。自分が体験した教室に感想を友達に言うことで友達はその教室についてどんな様子か想像するそうして、実際友達の行っていた教室に入り実際に自分で体験することで想像とは違った視点でその教室を見ることができるようになる。そして、それを繋ぎ合わせるせることで自分の新しい経験として蓄積することができるようになる。



A-A' 断面図　　1 /200

201824060　広瀬　右京